神ノ使徒 - サイレントフレイム -

徒花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神ノ使徒　-サイレントフレイム-

【Ｎコード】
Ｎ３１００Ｉ

【作者名】
徒花

【あらすじ】

「戦うしかないんだ。考えるな！　殺らなきゃ殺られる！！」

戦争は終わらない。
今日も明日も、世界では罪もない人々が、儚くその命を散らしていく。
次第にそれが当たり前になって――戦争はまた拡散を続ける。

少しずつ血で汚れいく自分。
戦争に染まっていく自分。

ずっと退屈な毎日だった。変わる事を誰よりも望んでいたはずなのに今では変わっていく自分が何よりも怖い。

何の為に戦うのか？
誰の為に生きているのか？

苦悶する少年達を前に、奴らは簡単に人を消し去っていく。

一年前、突如として飛来した漆黒の翼。彼らから全てを奪い去ったそれは、

Ｌｕｃｉｆｅｒ　（ルシファー）　――そう呼ばれていた。

PROLOGUE　―序章―（前書き）

新暦ＸＸ年――
１２月１５日　ＰＭ　１５：００
ドイツ連邦共和国　［首都　Ｂｅｒｌｉｎ］

PROLOGUE　ー序章ー

「どうかね、バビロンの調子は？」

窓から差し込む淡緑色の光に一時目を細めて、男は問いかけた。観測室から伺う様子からは、とりわけ問題はなさそうにも思えたが念の為だ。

ガラス一枚隔てた広々とした空間。その内部では、昨日、遂に完成した巨大な円環が重量をまるで感じさせずに宙に浮かび、単純な回転運動を繰り返す。淡緑色の光は環の中心から止めどなく溢れ出し、放物線を描きながらここまで伸びていた。銀河星雲。瞬く光芒に男はそんな印象を覚えた。

「今のところは順調です。ただ――」

男の問いに敬語を交えて答える研究員。彼の言動やこの男の雰囲気から、この男の地位の高さが伺える。

「ただ、なんだ？」

「バビロンの中心部、ワームホールから今までにない波長の異常なエネルギーが僅かに観測されています」

そう言いながら研究員は実験観測モニターの画面を指差した。

直径３０ｍを超える環状の空間跳躍システム“バビロン”は不気味なまでに美しかった。

「今までにないエネルギー？」

「はい。エネルギー自体は魔力に酷似した反応を示しているのですが、何分、私も見たことのない代物ですので、サンプルを採取し、時間をかけて検討してみないことには何とも……」

「起動実験には支障が出ているのか？」

研究員は暫くの間、モニターを黙って見つめ思慮を巡らせていたが、やがて静かに口を開く。

「今のところは……まだ。ただ、このエネルギーの感知が不測の事態であることには違いありません。実験の中止が得策かと」

「ならん！　バビロンの起動実験にこぎつけるまでにどれだけの税金と時間を使ってきたと思っている。バビロンには我が国の命運がかかっているのだ」

男は言った。どれだけの税金――と。つまり男は国、政府の人間であると言うことだ。

男の上着の襟元には、この国の官吏であることを示す六亡星の印章が縫い付けられていた。

「いいな。起動実験は中止するな。何があってもだ」

「……分かりました」

その時だった。

「バビロン内部に強力なエネルギー反応！」

研究員の一人が声を張り上げる。

「反応は依然として上昇中。２０００……９０００００……測定できません！」

「な、なんだって！？」

官吏と話していた研究員も事の重大さを悟ってかたまらず声を上げながら、勢いよく立ちあがる。

「更にバビロンを通して転送されてくる物体あり」

不運というものは続くものだと、つくづく実感する。いや、それとも、先ほどのエネルギー反応と転送されてくる物体には何らかの因果関係があるのだろうか。研究員は訝しんだが、結論を出すにはまだ情報が足りなかった。

「凄い数です……」

それらの数値は留まることを知らず、上昇する異常にモニターはやがてエラーを表示する。画面が火花を散らして沈黙した。

「何が起こっている！？」

狼狽する男。見るからに余裕がない。先ほどのやり取りからわかるように、この起動実験はこの男――ないし国にとっての命運を決定付ける重要な実験だ。中断するわけにもまして失敗するわけにもいかない。男の動揺も頷ける。

「知りませんよ。何もかもが私たちの理解を超えている！」

動揺しているのは、彼も同じか。

学者と言うのは理解を超えるもの、不測の事態には脆い。現に、此処には各分野から多くの優秀な学者達が集められているが、誰一人としてこの事態を回避する術を知りえなかった。全てが理解を超えていた。

「ワ、ワームホール拡大！」

「何！？」

「飲み込まれます！」

「総員退避！」

「ま、間に合わない！」

イギリスの天才学者が魔力説を元に世界に革新を開いてから、長い月日が過ぎていた。

魔術と科学技術。２つの人類の力が人間社会を飛躍的に発展させようとも、人々の探究心は飽きることなく、研究者たちはより高いレベルでの研究に手を伸ばしていった。

それが、悲劇の始まりとも知らずに……。

karman ―羯磨―（前書き）

1年前のあの日……。
楽園の崩壊と共に全ては始まった。

karman ―羯磨―

「えー。ですから、西暦２０ＸＸ年。つまり、新暦４７年にかのロナルド・カナード氏によって考案された万有エネルギー説が、現在の魔力説の根幹を成しており、彼の業績は――」

何回、いや何十回と聞かされてきた新暦創世のこの話。机の上では白紙のノートが寂しそうにそよ風でページをめくる。少年は大きく欠伸をすると、今日もまたぼんやりと教室から外を眺めていた。

そう。時は遡り、イギリスの一人の天才から全ては始まった。
ロナルド・カナード。
世界屈指の大富豪にして、あらゆる学問に精通する西暦最後の天才。

２０ＸＸ年。
彼が公表したその研究成果に世界は震撼した。それは彼の常軌を逸した研究内容というよりもその手法にあった。あらゆる倫理的な事柄を無視し、金と権力にものを言わせたその研究手段は、人道に反した残酷無比なものであり、当時多くの反感を買ったが、彼は自分の正当性とその理論を取り下げようとはしなかった。

超常現象と万有エネルギー説。

彼は言った。
この世の森羅万象には我々が未だ知りえない未知のエネルギーが存在している。これを私は魔力と名付けた。現在、我々の理解の範疇を超える数多くの現象は魔力による作用である。超常現象とは自然

界に蓄えられた魔力が解放状態になり発生する。
また、俗に言う超能力も同じである。超能力者とは並みならぬ卓越した魔力を生まれながらに、あるいは何らかの起因によって自らの肉体に所持している人物だ。

無論、こんな馬鹿げた話を信じる者は当初誰一人としていなかったが、彼は自らの理論の科学的な応用の試作として、魔力制御装置なるものを開発に成功していた。それにより、彼は自らの魔力の制御能力を著しく高め、自身が常軌を逸する力を使用することでその理論の有効性を証明する。

１３年後、人々は彼の理論を認めざるを負えなくなる。彼を否定する世界中の何百人もの優秀な科学者が、どれだけの月日を実験や考察に費やそうとも、彼の万有エネルギー説が覆ることはなく、学者たちは彼を認めたのだった。同時に世界は困惑と疑念が入り混じる中、魔力の存在を認め始め、それを期に世界は大きな変革を迎える。

軍事的な魔力の利用をはじめ、医療面や科学技術にまでその手を伸ばした魔力は、人類の平均寿命を大幅に底上げし、再生医療の実現や宇宙移住計画の推進に大きく貢献した。また、化石燃料や原子力エネルギーに比べ生態系への悪影響も少なく、その幅広い利用価値により世界中で電力よりも重要視されるエネルギーとなる。
魔力制御装置があれば一般人でさえ卓越した力（魔術）が使えるという事実。
魔術学校の建設や魔力制御装置の小型化、量産。魔力の予備バッテリーの開発。そして、一般市民への支給と胎児の遺伝子組み換えによる能力者の人工的な出産。

魔術とはもはや夢物語ではなく現実的な存在となった。

魔術と科学技術。２つの人類の力により飛躍的に発展と英華を極める人間社会。
その大元たる魔力説。その考案者たるロナルド・カナード。
人々はいつしか、キリスト生誕と同じように彼の生まれた年を新暦元年とし、人類は神となった。

「では、残りの時間はこのプリントをやって下さい」
前の席から回ってきたプリントを面倒くさそうに後ろの席へと回すと、少年はおもむろに教科書を閉じ、ノートをしまうと、ゆっくりと机に顔を伏せた。そして、クラスメート達の筆記音を微かに耳に残し、少年は夢の世界へと落ちて行った。

能力者に対する迫害問題や宗教問題。凶悪犯罪の増加。能力者の人工的な生誕には未だ莫大な費用を要し、まだ課題も多いが、それでも世界は確実に前進していた。
しかし、その歩みが人類に一体何をもたらせるのか。それはまだ誰にも分からない……。

「彰ぁー。折角の昼休みに何ぼぉーとしてんだよ。こんな日は、外でも行ってバスケでもしようぜ」
時間は飛んで昼休み。給食を片付けるなり、短髪の一人の生徒が馴れ馴れしく少年の名前を呼ぶ。
彼の名は倉元和也（クラモト カズヤ）。
家が隣同士で付き合いが一番長い友達――いわゆる幼なじみだ。
性格は活発で陽気。考えるよりも先に行動するタイプだが、意外と

繊細で感情の浮き沈みが激しい気質がある。

「嫌だね。和也はいつも弱すぎて、話にならない」

一方で彰と呼ばれた少年は無口で毒舌。あまり好んで会話をしないが、一度口を開けば、相手なんて関係なしにその言葉にクロスカウンターを合わせて来る。

何事も行動する前に思考を巡らせて、後先の事と自分の利益を追求する酷く利己的な一面を持ち、和也とは対極に近い性格だが、それにもかかわらず、いや、それ故にお互いが何か強い感情で結ばれていた。

「いいからとっとと行くぞ。この、万年引きこもりが！」

「黙れ、負け犬。お前はその引きこもりに勉強も運動でさえも一回も勝った事ないだろ」

ちなみに彰は、基本的に群れる事と面倒な事を嫌う性分であるが、運動神経、学力、共にかなり優秀な生徒だ。が、積極的に自分を示さないその性格が邪魔して、そのことはあまり知られていない。

「う、うっせぇー。人が気にしてることを平然とクラスに公開してんじゃねえよ」

「やっぱり気にしてたんだな」

その、“やっぱり”と言う部分に彰の意地の悪さが一番よく出ていた。

「とにかく、いいから来い！　来なかったら、お前の不戦敗だから

な」

クスクスと笑い声の漏れる教室に居づらくなったのか、和也はそう言い残して教室から消えてしまった。

一方、彰はと言うと――動じない。和也が出ていったのを確認すると鞄から一冊の本を取り出して、ぱらぱらとめくり始めた。

「ねぇ、彰くん行かないの？」

何事もなかったかのように、教室はおろか、席からさえ立とうとしない彰にクラスメートの安堂加奈（アンドウカナ）という女子が話しかける。

艶のある長い黒髪が印象的である彼女は、彰が一番よく話す女子だ。特に付き合いがあるというわけではないが、周りにはそういう目で見ている人たちもいる。彰はそれを強く否定する事もなく、何か尋ねられた時は事実を事実のままに淡々と周りには言い聞かせるようにしてきた。加奈の気持ちも定かではないが、その事を尋ねられた加奈は、答える事もなく俯いてしまう事が多いらしい。

「行かないって、普通。今、冬だろ？　外寒いって」

「でも、和也くん待ってるんじゃない？」

加奈の言葉と聞くと、彰はまるで吹き出すように笑い始めた。手を口元にあてて懸命に隠すも、声は隠せず僅かに震えてしまう。

「外のコートで一人待ってる和也を想像すると、笑える」

あっさりとひどい事を言ってのける彰に、加奈は一息挟むと、呆れたような口調で言った。

「彰くんのその性格って小学の時から変わらないよね。ほんと、どSって感じ」

「変える必要がないからな。割と楽しいし。ま、和也もバカじゃなきゃすぐに戻ってくるさ」

それから、２０分後。
昼休み終了を告げるチャイムが鳴り、５限目の授業が始まる直前、

「おい、彰。なんで来なかったんだよ！　外で待ってたんだぞ」

先生が教卓に立ち、週番の号令で礼をし終えると同時に、和也は教室に駆け込んできた。

「お前ほんと期待を裏切らない奴だな」

その後、暫くの間、彰の笑い声が止まらなかったのは言うまでもない。

目に映る世界はいつでも平和だった。そこには約束された安全と温かい生活があり、刺激のない日常は、何処か退屈で、少年にとっては物足りなさの残るものではあったが、それでもドラマがあって、保障された平穏の中では優しい笑顔が舞っていた。
今日も、明日も、きっと一年先だってそれは変わらない。そこに根拠はなにもかかわらず、誰しもがその平和を永久不変のものとして世界を見る。無知と言う罪の下で、儚く散った人の数など知りもせず、まだ何も知らず、当然の様に平和な生活を送っていた自分が―

―そこにいた。

新暦８１年――　１１月２７日　１４時１７分
彼らにとっての運命の瞬間が……やってきた。

ルシファー日本襲来！！

「何だ……アレ」

５限目の数学の授業。いつもと同じように、いつもと何ら変わりなく、漠然と空を仰いでいた彰の視界に入る黒い点。それはまるで無数のカラスのように、空を黒く覆いつくす。それが、ただのカラスの大群でないことを知ったとき、彰はただ茫然とすることしかできなかった。

「ど、どうかしたの？　水原くん」

あまりに理解を超えた光景に授業など関係なしに席を立ち、彰はそれに釘付けとなった。彼には教師の声などまるで届いておらず、気が付けば無心の内に声を洩らしていた。

「人が、黒い人が――来る」

一拍の静寂を置いて、突如、凄まじい轟音が辺りに響き渡った。
サイレンだ――という認識と共に心配そうにあたりを見渡す人々。
教室はどよめいた。

「な、何だ？　非常ベル？」

「いったい何処で鳴っているの？」

こういう時は教師も生徒も大差ない。ただただ、あたふたと狼狽し立ち尽くすのみ。そうして人々はやがてそれに気付き、空の異様なその光景に唖然とし言葉を失う。

人だ……。人が空を覆っている。
黒い人間が――此処へ向かって来る。

「ななな、何だよ。あれは！？」

理解に苦しむ状況の中、最初に声を上げた和也を筆頭に不安と混乱は瞬く間に伝染した。人々の間を何とも表現しがたい、未知への恐怖が駆け抜ける。そんな時、最初にまともなことを言ったのは、やはり経験で僅かに勝る大人たちであった。

「と、とりあえず、サイレンに従って、一旦シェルターに避難しましょう」

もし、この一言が奴らの危機が身近に感じられる状況下で放たれていたとしたら、パニック状態の人々は、互いが互いを認識できずに、拡大する恐怖の中で、此処の人間は全員がこの場で朽ちていた。
しかし、幸いなことに奴らはまだ遠い空の彼方。そして、人々は奴

らの脅威をまだ知らない。その事が、彼らの危機感を最小限に抑えていた。勿論、未知への恐怖で半ばパニック状態の人も数名は居たが、まだ冷静さと自分を失っていない大半の人々の波に呑まれ、全員が校舎裏へと移動を開始した。

「今からブロックを開くので少し下がっていてください」

3年生の学年主任である一人の女教師が校舎の隅に設けられた電力盤に歩み寄る。女教師はその電力盤を断りもなく勝手に開くと、丸くかたどってある窪みに手を当てて、小さく何か呪文のようなものを呟いた。すると、それに応えるかの如く電力盤は起動し、青白い光を放ち始める。

《退避責任者のコードナンバー及び霧原区における警戒態勢の確認。30秒後にゲートが開きます》

電力盤から響く機械的なアナウンスを確認し、女教師は電力盤を閉めて振り返る。

「ゲートが開いたら、慌てずに1組から順にトランスポーターに乗って避難してください」

同時に、地鳴りが校舎裏に響き渡り、地面が音を立てて裂けたかと思うと、地中から巨大なものが現れた。円筒型の電話ボックスのような形をしたその装置は、綺麗なエメラルド色の光を放ちながら人々を待っている。

「トランスポーターって、地中から生えてくるものじゃないよな？」

漠然とそれを見つめながら彰は呟いた。

トランスポーター。正式名称を“中距離空間跳躍システム”。別の場所に設置されたもう一台のトランスポーターとの間の空間を歪曲させ、ゲートと呼ばれる技術によってふたつの歪曲空間を結合し固定化するシステム。それにより、トランスポーター内部の人々をもう一方の空間に転送することができる。

しかし、この空間跳躍システムにも限界があり、装置の規模によるが、同時に転送できる物体の質量や転送距離にはおおよその限りがある。どれほど大規模な装置でも総重量１２００ｋｇ。移動距離９ｋｍ。これが今の人類科学の限界だ。もっとも、非常用に設置されただけのこのトランスポーターの内臓魔力と機能性では、せいぜい一度に生徒１０数人。半径４ｋｍ圏内ほどで限界だろうが。

「それでは１組の出席番号１～１０の人からトランスポーターで――」

教師たちが統制を取り、生徒達を安全に、かつ迅速に順々に避難シェルターへと転送させていく。人がトランスポーターの薄緑色の光に包まれて下部から上部へと一瞬で消えていくのは、いくら科学進んでいるこの時代に生きる彰であっても、なんだか不思議な感じがするものだ。が、あまり心地の良い光景ではない。

「じゃあ、彰くん先に行ってるね」

「しばしのお別れだな。向こうで待ってる」

加奈に続き、和也までもがヒラヒラと手を振って、トランスポーターの先へと消えていく。光が下から上昇するにつれて、足先から腰、胸、最後に頭部が瞬く間に粒子化し、その場から完全に姿を消すと、後には、月晶石に近い白透色の燐がはらはらと砂のようにこぼれていた。

自分の順番が来る間――いや、空の天外に最初に奴らを見た時から、彰は奴らの事ばかり、ずっと気にしていた。それは周りと同じような、ただ能天気な好奇心などではなく、真剣な考察と分析である。奴らは一体何なのか、奴らの出現が僕らの避難の直接の原因なのか……。そんな事を永遠と考えていた。勿論、この情報の少ない状況では明確な事は何一つとして分かりはしない。だが、ひとつ、たった一つだけ分かったことがあった。

それは、奴らは敵で、奴らからは逃げなくてはならないという事。

数年前の民間用飛行機の廃止宣言。ヨーロッパにおける入国規制。それらは、環境保全や内乱の過激化、国家間の関係悪化が起因の一つとして報道されていたが、情報操作という国の陰謀が見え隠れしていたのは明白だった。恐らく、それらの事象には奴らの行動が直結している。そう思う。奴らの行動圏の一部には空がある。そして奴らが、こちらに対して何らかの攻撃行動を示すとするならば、近年の不可解な国家の行動のいくつかは説明がつく。寧ろ、そちらの方が自然な流れだろう。全てが推測の域を脱していないが、奴らは脅威となる。その事だけは理解できた。

「次は出席番号３０～４０の人――」

深々と思慮を巡らせる内に自分の番が回ってきた彰はトランスポーターへと移動する。

「それでは転送しますよ」

――何だろう。この感じ。きっとトランスポーターでの移動とは関係がない。感じるんだ。何か、とてつもなく嫌な予感を。

「よっ。案外遅かったじゃんか」

トランスポーターを通してシェルターへと転送された彰を眼前で待ち受けていたのは和也。仁王立ちを決め込んで、腕を組むその姿は、無駄に偉そうで――正直言って、邪魔だった。

「そうか？　普通だろ」

吐息をつく。胸騒ぎは、一行に収まらない。

「ここがシェルター……なのか？」

彰は辺りを見渡しながら小さく呟いた。学校の体育館の何倍もの大きさの広い空間。壁は大きく歪曲していてドーム状になっている。壁のあちこちにハイテクな機器があり、見たこともない形状をしたパネルがあり、空気洗浄機の様なものがあり、冷暖房機まで見受けられた。避難所としてはかなりの設備だろう。それを見て彰が最初に思った事――。

「こんな場所があったんだな……」

「ホントだよ。こんなの作る暇と金があるなら、もっと町を発展させろよな。全く」

自分たちの住み、過ごしてきた田舎風の町並みに比べて、そこは避難所なのにもかかわらず、随分と近代的で、まるで今までとは別の世界のようだった。そして、彰はその世界に浸るうちに安心し始め

ている自分を感じていた。

――此処なら。あの胸騒ぎは気のせいか。

ここが安全な場所だという認識と共に彰は、ほっと胸を撫で下ろす。

シェルター空間に転送されてくる人々は皆めいめいに固まって何やら喋り合っていた。この閉ざされた空間は外部との関係と遮断する。その事が人々に安心感を与え、ここなら安心だと、人々はいつにも増して口が動く。外の世界がどうなっているかなんて知りもしないで。

「あれは絶対宇宙人だって！」

今日の和也はよく喋る。

「和也くんって夢のあること言うよね」

「単に和也はガキなんだよ」

まるで和也に興味がないかのように、彰は避難してきた人々に目を向けながら、さらっと言った。そもそも、魔術による科学の飛躍的な進歩しより、宇宙の開発は進み、木星までの探索が既に完了している。魔科学的な研究と分析によって開拓されたこの時代に宇宙人はあり得ない。

「何だと―！　そういう彰はどうなんだよ」

「……知るか」

「アハハハ。彰くんならそう言うと思った」
笑い声に包まれながら、いつもと変わらない他愛のない会話を繰り返す和也、加奈。そして、彰。そこにいた誰もが、これで終わったと思っていた。もう外は大丈夫。明日からはまた平凡で幸せな日々に戻ることができるって、そう思っていた。

「お、おぃ。何が起こった。Ｗ４ブロック応答しろ！」
彰達がシェルターに避難を終えてから、２時間余りの時間が経とうとしていた。シェルターの入り口付近を見張る自衛隊の隊員と思われる二人が、入り口脇の壁に設けられた、通信用の電子画面に向かって必死に呼びかける。

「何かあったのか？」
状況が掴めず、ただ茫然と眺めることしかできない避難民の人々。しかし、自衛隊員の二人の必死な呼びかけとは裏腹に、Ｗ４ブロックとの通信は途絶えてしまった。

「何てことだ……。まさかＷ４ブロックが！？」
「Ｗ４ブロックって言ったらすぐ近くじゃないか」
避難民に悟られぬように、端で小さく言葉を交える二人の表情は、次第に青ざめて、焦りと不安に駆られていく。
「と、とにかく……今はここにいる人々を別の区画のシェルターに移動させないと。此処は、時期に奴らの勢力圏になる。そうすれば、

見つかるのも時間の問題だ」

「だが、どうやって！？　この辺り一帯でトランスポーターのある施設は、殆ど壊滅状態だぞ？　それにここより安全な場所なんてそうそう――」

避難民の動揺は集団パニックに繋がる。そのために、小声で話してはいたが、二人の表情は目に見えて暗く、避難民にもまた少しずつではあるが、恐怖を感じ始めていた。

その時だった。

響く爆音。砕ける隔壁。その衝撃は隔壁の付近にいた二人をまるで紙屑のようにいとも簡単に吹き飛ばす。宙を舞い、地面に叩きつけられて床を数回転転がった後、ぴくりとも動かなくなった二人を前に恐怖の念に呑まれる人々。だがしかし、更に追い打ちをかけるかのように、奴はゆっくりと彰たちの前へと顔を出す。

「何だ。アレ……は……悪魔？」

避難民の一人がそう呟いたきり絶句する。不吉に揺らめきながら爆炎の中を近づいて来る、黒い、人間のようなもの。人間よりも一回り大きい体躯は、漆色の装飾に統一され、頭部には悪魔を思わせる醜悪な仮面が、まだ新しい人間の返り血で血塗られている。それら全てが奴らへの恐怖を一層駆り立てていた。

たった一人。たった一人のその黒い人間だと言うにもかかわらず、その禍々しい雰囲気に支配された一人の避難民は足がすくんで、逃げ出すことは愚か、立ち上がることさえ出来ずに小刻みに震えてい

た。それでも必死に後退しようと試みるが、体は一向に言うことを聞きはしない。その瞬間。奴の醜悪な仮面が悪魔のように微かに微笑んだ。そんな気がした。

「……うっ……」

それは、まさに一瞬だった。奴の右腕は関節が外れたかのように骨組みを失うと、そのまま構造を変異させ槍のような鋭い４本の長い爪の形状を持つものへとその腕を変貌させ、鋭利は男を貫通した。貫かれた男はぐったりと力を失い、奴は全身に返り血を浴び、ゆっくりと男の体を放り投げる。

「う、うわぁぁぁぁぁー！」

絶望の侵入。奴の脅威を目の当たりにした人々は雪崩の如く逃げ惑い、悲鳴が豪雨のように降り注いだ。

「どけ！　俺が先だ！」

「私が先よ！」

人々は生き延びるために誰もがトランスポーターへと駆け寄ったが、そこに冷静さはなく、“自分が、自分が！”と自己優先的で統制のとれない動きで醜くトランスポーターを奪い合う。最早、そのトランスポーターは何処にも繋がっていないなんて知りもしないで。

「彰くん……」

「彰、俺達も逃げるぞ！」

加奈も和也も波に呑まれる事に何の迷いも躊躇いもなくトランスポーターへと走り出す。
集団パニック。誰もが冷静さを失っていた。

しかし、

「バカ！　そっちじゃない！」

彰は和也と加奈を引き止めた。

「何でだよ！　お前死にたいのかよ。殺されるぞ！」

怒鳴り散らす和也。加奈は何も言わずに彰を見つめていた。切迫する空気の中、人々が随時、駆けていく。

「トランスポーターで逃げられるわけがないんだよ」

――そうだ、冷静になれ。波に呑まれてはダメだ。

彰は何度も自分に言い聞かせる。生きるために。そして、大切な人を守るために。

人間には耐性がある。ストレスに強い人間もいれば、病気に強い人間もいる。それらの違いには人それぞれの体得している耐性の相違が関係している。水原彰は内向的な性格で、昔から物事に対し必要以上の注意を払い、深く論理的思考を巡らせ、分析する能力に長けた人間であった。それ故、子供とは思えないほどに、感情が安定しており、冷静で落ち着きのある少年だった。あまり感情を表に出さず、何事においても取り乱さない。そんな彼の性格がこのパニック状態の隔離シェルターで最大限に発揮される。

「緊急時用のあのトランスポーターでの移動は一回に十数人が限界だ。それに、学校で先生が最初にトランスポーターを起動した時から察するに、起動には何らかの音声コードと登録された責任者コードが必要なのは明らか。が、この状況では登録責任者はトランスポーターまで辿り着けない。このままじゃどの道、奴に追いつかれる」

――だが、どうする？　シェルターの入り口からは奴がじりじりと詰め寄ってくる。いや、相手は一人だ。回り込めばそのまま奴の後ろから……無理だ。それじゃ危険すぎる。奴の能力は未知数。それにさっきの動き。あの早さで攻撃行動を取られたら、さっきの男の二の舞だ。

「……」

口元を手で隠し、厳めしく眉を寄せるその格好は、彰の癖とも言えるものだった。トランスポーターの転送を待っていた時と同じく、論理的な思考を巡らせる時、彰の癖は顔を出す。辺りは忙しく動いているのに、冷然と立ち尽くすその様は、まるで彰の周りだけ時が停止している様だった。

――シェルター！？　こんな大規模なシェルター。果たして地上に造るだろうか？　確信はないが……。いや、空気洗浄機。冷暖房。可能性は高い。そもそも、こんな規模の施設は地上で見たこともないし、何よりも、奴が侵入してきた入口。あの光は照明によるもので、日差しじゃない。日没にはまだ早すぎる。

瞬間、澄み切った黒い瞳に希望が差した。

――ここは地下か！

思考の論理は直ぐ様、現状を打破する推論を紡ぎ出す。いくらシェルターとはいっても出入り口が一つと言うのは幾分、可笑しな話だ。それは敵の侵入を許してしまった際に、一網打尽にされてしまう危険性を残す事になる。なら、他に予備の出口があったとしても不思議じゃない――それが彰の推察だった。
彰は注意深く辺りを見渡した。

――あった！　あそこなら奴に追いつかれる前に何とか辿り着ける。

「和也、加奈。こっちだ！」

彰は2人を促した。

「こっちって……どこ行くんだよ！？」

「いいから来い！」

長々と説明している暇はなかった。奴は、刻一刻と近づいているから。
冷静な判断力を失ってトランスポーターを奪い合う哀れな人々を掻き分けながら、彰は走りだした。和也と加奈も、彰を見失わないようにと後を追う。
彰は一寸の迷いもなく、数ある扉の中から一つの場所を非常口に限定していた。そこは、入口から適度に離れた位置になければならず、かつトランスポーターに近すぎてもならない。この時点で非常口と目される扉は既に3つに絞られていたが、彰がその中から一つに限定した理由は一つ。ドアノブだ。
この時代、この設備の中でそんな旧式の扉を設けているのは、魔力、電力の供給が停止した場合、つまり非常時の備え以外はあり得ない。

それ故に、その扉が非常口としての機能をはたしている可能性に彰は行き着いた。

非常口と目される扉へと辿り着いた時、奴にはまだ追いつかれていなかった。と言うよりも、奴は来ないだろう。奴はきっとトランスポーターへと足を向ける。

彰には分かっていた。それはこれまでの理屈立てた思考に比べれば、寧ろ直観に近い感覚的な概念であったのだが、奴の目的が殺戮ならば、退路を断つべくトランスポーターの破壊を優先するのは至極当然だという判断もある。

残酷な話、彰は他の人々を囮にしていた。いや、その言い方は正しくないかもしれない。生きる為に。そして、守る為に、彰は自身のできる精一杯のことをしたのだ。

「ここから脱出する」

一呼吸をはさんで、ゆっくりとドアノブに手をかける。

心臓がうるさく耳に障り、彰は目をつむった。

――頼む。

そして、中から見えたのは――。

上方へと長く伸びる薄暗い光。階段。この絶望下に残された唯一の脱出ルート。

開かれたその扉の内面には取っ手がなく、扉は閉ざす事で外壁へと同化してその身を隠し、後方からの光は完全に遮断された。

だが、最早そんなことはどうでも良かった。彰達は希望を目の前の希望に一目散に階段を駆け上がる。そこに余裕なんてなかった。後ろなんて見たくもなかった。
奴の醜悪の仮面。奴の異様なうめき声。奴の荒々しく乱れた呼吸。その全てに恐怖していた。近づいて来る死の恐怖に耐えられなかった。
差し込む光が一層色濃く映える。遠のいていく恐怖に、たぐり寄せるのは希望。

地上へと再び顔を出したとき、全てから解放されると思っていた。外に出れば、もう助かると。また平穏な日常に戻れると。思っていた。いや、思わずには、信じずにはいられなかった。そこに在るかも分からない希望を信じなければ、もう彰達は歩き出せなかった。

しかし、すがり付いた希望の先で、彰達を待ち受けていたものは――またしても、絶望だった。

ｐｅｒｓｏｎａ　―独立主体―（前書き）

残された選択は戦うことだけだった。
大切な人をただ、守りたいから。

ｐｅｒｓｏｎａ　ー独立主体ー

「何だ、これは……」

階段はとある山の一部へと通じていた。そこで手に入れたはずの光、希望。しかし、そこから見える惨劇を前に、彰達は立ち尽くすことしかできず、言葉を失ってしまっていた。

「……」

燃え上がる炎。立ち上がる爆煙。大地をうごめく黒い影。彰達の知っている町並みは、そこにはなかった。自分達の町、平和、希望は粉々に粉砕されていた。高い場所から見下ろしているが為に惨劇の全体像がよく見える。だから、理解できた。あの町はもう自分たちの町じゃないって事が。

見上げた空は焼けている。誰もが知っているその美しい黄昏もまた、もう自分達のものではないのかもしれない。

崩れ落ちる世界を前に、ただ頭が真っ白になった。絶望、虚無、逃避。自分の知るどんな言葉を持ってしても表現できないような負の塊がそこにはあった。

だが、現実は感傷に浸る時間でさえ、神は与えようとはしなかった。彼らを更に追い込むように、惨劇は残酷に襲いかかる。

「な、何！？」

鼓膜を破るような激しい爆発音と共に階段の下から突風が吹き抜ける。

――この風、熱い。爆風か！？

「お、おぃ。どうなってんだよ。彰……」

答えを求めてうろたえる和也。彰はそれに示せる答えを持っていた。と言うよりも、和也も少し考えれば分かる事だった。ただ、考えたくないだけ。認めたくないだけだ。

顔を伏せて言葉に詰まらせる彰。その隣で加奈は泣いていた。シェルターから逃げ延びても、そこには残酷な世界が待ち受けていただけ。耐え難い悲しみと辛さに、彼女は顔に手を当てて声をあげていた。

「加奈……どうしたんだよ」

下からは更に数回爆音が轟き、微かに内壁が崩れ落ちるような音が聞こえていた。隔離シェルターの崩壊。

――みんな。

「彰！　どうなってるんだよ」

何処を見ているのか分からない虚ろな瞳。やはり、和也も本当は分かっているんだろう。それを現実として受け止める覚悟がないだけで――。

「皆……死んだよ。さっきの爆音はきっと奴の攻撃。そして、今のこの状況で僕達にできることは――何もない」

彰は唇を噛み締めた。込み上げてくる悲愴。そして、憤り。その怒

りの矛先は奴らだけではなかった。寧ろその大半が自分。皆の命を犠牲にして、のうのうと生き残っている自分へのもの。あれが、自分にできる最良の選択だった。そんなものは自己満足にすぎない。逃げ道を見つけたあの瞬間に、伝えるべきだった。ここから出れると。逃げれると。例え、声が届かなかったとしても、その一言で、救えた命があったはずだ。

――結局、見捨てたんだ。自分が生きるために、僕は……皆を。

彰は泣いた。生れて初めてと言っていいほどに大声で。感情を剥き出しにして、ありのままに、泣いた。助けられなかった友人を。犠牲にした友人を。自分の無力さを。自分の非道さを。自分と言う、ちっぽけな存在を悔いた。

そして――悲劇は次の舞台に移行する。

「行こう……。いつまでも泣いていられない。僕達は生きなきゃいけないんだ」

――そうだ。僕達は、もう死ねない。何としても生きるんだ。僕達のこの命は、皆の命の犠牲の上に成り立っているのだから……。

2人は何も言わずに頷いた。まだ抱えきれない深い傷心をその華奢な体に背負いながら、彰達は、重い足取りでゆっくりと歩き出す。

しかし、その瞬間、彰達の前に再び恐怖が戻ってくる。異様なうめき声が、焼けた空に轟く。シェルターを破った時、皆を殺したあの時と同じ様に、後方から木霊するそれに、彰達は反射的に振り返った。

刹那、激しい爆発と共に大地は揺らめき、爆砕する非常階段。その

小さな破片が彰の頬を微かに切り裂き、すっと鮮血が垂れた。そして、辺りの木々が悲鳴を上げ、拡散する紅蓮の中で奴の影がうごめく。奴はもう目視できる範囲まで迫っていた。

「なっ――！」

――しつけぇよ！　奴は一人じゃない事くらい分かってたさ。だからって、このタイミングで出くわすことないだろ！　逃げ切れたと、思ったのに……。

彰達は愕然としていた。次第に震え出す手足。体は自分の物とは思えないほどに重く、奴の恐怖、死の恐怖が記憶の中からが甦る。

「お、おぃ、和也。加奈！　逃げるぞ！　アレに捕まったら、終わりだ」

恐怖に呑まれそうになる自分を必死に抑えるも、声は僅かに震えて、彰は叫ぶ。

だが、

「わ、分かってる。分かってんのに――。あ、足が……動かねえんだ」

二人は最早恐怖に染まっていた。足は言う事を聞かず、歩くことはおろか、気を抜けば立っていることさえままならない状況。自分の体が完全にその制御下から離れてく感じ。それが初めて体感する死の恐怖だ。

無理もない。こんな得体の知れない化け物が、何十人もの友人を虐殺し、そして、その順番がとうとう自分達へと回ってきたのだから。

中途半端な恐怖ではなく、自分の命が掌握される感覚。普通の人間なら恐怖に身も心も支配されてしまうだろう。無論、それは彰も同じだ。ただ、彰はその恐怖よりが普通より少しだけ軽かっただけ。何故なら、彰は既に体感したことがあるのだ。死の恐怖を。彰はかつての自分を二人に重ねていた。

「和也……加奈……」

彰は力もなく漏れるように呟いた。刻一刻と近づいてくる脅威。もう2人は逃げられないと悟った彰は、やがて血が滲むほど強く唇を噛み締める。

そして、

……

「――――!!」

恐怖に駆られるその体で、彰は奴に向かって走り出した。逃げ切れないのなら、もう逃げない。それが彰の答えだった。皆、死んだ。守れなかった。だから、この2人だけは、守り通すと心に決めた。ちっぽけな自分。だけど、大切な人たちは、今、目の前にいる。逃げられない。そして、絶対にやらせやしない。一人生きながらえた明日にきっと意味なんてないから。

彰は奴の爆発によって破壊された階段に使われていたと思われる鉄のパイプを拾うと、その勢いに身を任せ、高々と飛翔し、目標に力の限りに振り下ろす。ありったけの勇気を込めて。

だが、

「っ――！？」

半端のない反動に腕が返される。腕に痺れが走った。まるで、岩石を叩いたかのような異常な硬さ。

「こっの、バケモノがぁー！」

反動で大きく後ろへ弾かれたその右腕を今度は、一番防御の薄そうな顔面へと、側面から渾身の力で薙いだが、キーンと金属同士がぶつかり合う様な共鳴音が響き渡るだけで、結果は何も変わらない。

――ヤバい。こいつ、物理的な攻撃は効かないのか！？

奴のあまりの頑丈さに驚愕し、彰は焦燥を募らせる。そんな中、奴の纏う空気が変わると共に、ピリピリとした圧迫感が空間を満たしてく。

――何か来る。爆撃か！？

何が来るにせよ、その場に立ち尽くしては、的になるだけだと判断にした彰は、即座にその場から走り出した。

その時だった。奴が手を向けたその場所。つまり、先程まで彰がいたその区間が、突如、爆発する。

「なっ――！」

運よく直撃は回避することができた彰だが、余りに凄まじい爆風に

足は地を離れ、大きく吹き飛ばされる。落下の瞬間、咄嗟に、受け身をとるも、それでも勢いは止まらずに、強い衝撃が全身を襲った。

――これが……奴の魔術。なんて、威力だよ……。

万一、直撃したらと考えると、それだけで嫌な汗が垂れる。普段、彰達が使う些細な術とはまるで比にならない魔術。肌で感じる奴の脅威を前に、心臓はいつになく強く脈を打って、手足は震えを増すばかりだ。

彰は再び鉄パイプを握り直す。通用しないのは分かっていた。しかし、他にすがるものはなかった。選択肢もまた――。やらなきゃやられる。それだけだ。

「くたばれぇ――！」

彰は再び奴に飛びかかる。奴を倒さなければ、彼らにもう未来はなかった。

風が吹き荒れ、木の葉が散る。

弾けた希望がガラス細工のように宙を舞った。目を大きく見開き、彰は言葉を失う。決死の覚悟も虚しく、振り下ろす鉄パイプを薙ぎ払う奴の左腕が、軌道をそらすどころか、そのまま鉄パイプを破壊した。その手に握るのは最早、鉄屑。策はない。

残酷にも襲いかかる奴の反撃は、切り返しの右腕。それは瞬く間に鋭利な爪牙となり、一直線に彰へ伸びる。

――僕は……死ぬのか？　多くの者を犠牲にして、大切なものも守れずに……。誰も守れずに。何も守れずに。何も出来ずに――。

一瞬の時間が永遠の様な長さで流れゆく。避けがたい死を直感的に悟った。
ふと、頭に浮かんだのは、今はもう世界中どこを探してもいるはずのない、彰の代りに死んだ優しい温もり。虚空に消えたその顔は何故か微笑んでいたように見えた。

――僕は……。

「彰ぁぁぁ――！」

止まり行く時の中。和也の慟哭が無情にも世界へと響き渡る。

ドクンッ――――。

その時、僕の中で何かが解き放たれるような――そんな感覚が全身を駆け巡った。血が熱くなり、跳ね上がる鼓動。今まで感じたことがないくらいの衝動が湧き上がる。
少年よ。今が覚醒の時。

「……」

瞬間、彰の姿が消えたかと思うと、奴の背後に佇み、何かを見るわけでもなく漠然と空を見上げていた。

「――――」

何かぶつぶつと呟く彰。次第に、何処からか溢れ出した漆黒の光が、妖しく彰を包み込み、彰はゆっくりと視線を落して自分の両手を長らく見つめていた。

「あ、彰くん？」

ただ遥か後方から見ているだけの加奈でも容易に伺える彰の異常。黒い光だけではない。雰囲気、と言えばよいのだろうか。それが普段の彰が持っている物とはまるで違っている。あれは本当に彰なのか――そう疑念を抱く加奈を横目に、彰は不敵な笑みを浮かべていた。

そんな最中、再度繰り出される奴の猛攻。その攻撃は今までよりも更に動作を速め、それはただの人間が反応するにはあまりにも速く、ましては奴を見てもいない彰にとっては、尚のこと、回避は不可能だと思われるものだった。

しかし、その状況で彰は、いとも簡単に奴の攻撃を避けると、奴との距離を縮めて、右拳に力を溜める。そして、全力で振り抜いた。奴の鋼鉄の身体に向けて。

「彰……」

和也は目の前で起きている光景に頭がついていかなかった。友の変貌。彰が無事で嬉しいはずなのに、走る戦慄。和也はただ息を飲む。何かが砕けるような鈍い音が鳴り響くと同時に初めて奴の体は折れ曲がった。奴の吐き出した黒い体液をその身に浴びながら、彰の拳は深々と突き刺さり、奴があげる何処か苦しそうなうめき声。

しかし、奴の息の根はその程度では止まらなかった。微かに勢いの衰えた攻撃で彰を追う。だが、その動きでは最早、彰を捉えることはできず、それを避けることは今の彰には造作もない。そのまま彰は奴の腕を切り落とした。

刃物があったわけではない。しいて言うならば、それは手刀のようなもの。でたらめな型。力に任せただけの強引な技だった。表情もなく彰は奴を蹴り飛ばす。

「彰くん、どう……したの？　今の彰くん……怖いよ」

時折、彰の浮かべる悪魔のような表情。無口だけど優しかった彰とは思えない残虐な行動。彰に何が起こっているのか。加奈には分からなかった。けれど、彰は守るために戦っている。その事は分かっていたから、加奈は目を逸らさなかった。瞳に涙を光らせながら、彰を見守った。

そして、戦いは終盤を迎える。

身を翻し、遠心力を加えた回し蹴りが、奴を突き飛ばす。地面へと空を仰ぐ形で倒れ込んだ一瞬の隙を彰は見逃さなかった。彰の手刀が奴の胸部を貫通する。その段階で勝敗は既に決していたかの様に思えたが、それでも狂気は止まらない。その手で何かを掴み取るかのように、ゆっくりと手を引き抜いていく。
裂かれた胸部から吹き出す黒い血しぶきの中で、確かに脈動している命の核心――心臓。
彰はそれを荒々しく抉り取ると、何の躊躇いもなく――

握り潰した。

「ヴァァァァァ――――――――！！！！」

力を失いぐったりと奴は倒れる。奴の返り血を全身に被りながら、頬に付着する黒い鮮血を舐めすする彰。日が沈み、闇の広がる茜空

を仰ぎながら笑みを浮かべた。

「……」

彰のものではないその笑みと、赤く点滅する彰の黒い瞳が、今でも鮮明に加奈の脳裏に焼き付いている。

marine snow ―海雪―（前書き）

覚えていてくれるか？　僕のこと……。まだ何も知らない無垢な少年だった頃の“水原彰”という少年を、ただ覚えておいてほしい。

marine snow ―海雪―

5年前――　2月14日。バレンタイン。
“White Holiday”
後にそう称される事件があった。能力者の人工的な生誕が神の冒涜と非難する宗教団体が、人体魔道技術の権威者の親族を誘拐、監禁し、政府に対してテロ活動を行ったというものだ。無論、自分達の更なる利益の追求のために、魔術を肯定する世界情勢の中で、彼らの暴動は長く続きはしなかったが、一人の尊い命が犠牲となる。

“水原清美”――彰の母親だった。

テロ活動に彰は巻き込まれていた。何故ならば、彰の父親、明人こそが人体魔道技術の権威者であり、事件の当事者だからだ。
彰は明人を責めなかった。そんなことに意味なんてない。彰が一番分かっていた。誰にもどうすることのできない力の連鎖がそこには働いていたのだ。
突き付けられた銃口。震える手足。身を呈して息子を庇った母、清美。まだ寒い冬の日に、止めどなく流れる、大切な人の血だまりの中、彰の世界は一つの終わりを迎えていた。

清美の葬儀の後、明人は彰を叔母の元に預け、姿を消した。それは、同じ過ち送り返さないために、そして、権威ある科学者として多忙な生活を送る明人に、彰に割くだけの時間的ゆとりないと言う事が理由なのだろうが、明人の真意は定かではない。

「彰、心配はいらない。お前には神の守護が付いている。もう二度と、決してあんな思いはさせないから……」

それが、明人の最後の言葉だった。

気が付くと、そこには見知らぬ天井が広がっていた。窓辺から差し込む光が世界を明るく照らし出す。

――ここは？

上半身を起して辺りを伺う。一言でいえばそこは病室。それ以上でも、それ以下でもない。

真っ白な天井に固い病床。寝台の付近に心電図やその類がないという事は、どうやら、それほど深刻な外傷等で運ばれた訳ではなさそうだが、一つだけ意外な光景が目に映っていた。

「……加奈？」

思わず口に出してしまった彼女の名前。状況から察するに、長い間、傍に付いていてくれたのだろうか。椅子に腰かけ、ベッドの隅にうつ伏せて眠る加奈の姿がそこにはあった。

「う……ん……」

彰の呼びかけに反応するように加奈はゆっくりと瞼を開けると、まだ眠たそうに目をこするが、降り注ぐ光に意識が次第にはっきりしていくにつれて、昏睡状態であったはずの彼が目を覚ましている事に気が付いた。

「あ、彰くん……」

一足遅れて目を覚ました加奈の表情は、初め驚き一色で満たされていたが、直ぐにそれは安堵のものへと変わり、加奈の瞳からは音もなく涙が零れた。
瞬間、ガタンっと椅子が倒れる音が病室に響き渡り、彼女の綺麗な黒髪が宙をなびく。急な高鳴りを見せる鼓動。加奈は、何も言わずにただ彰を優しく抱きしめていた。

「なっ、お、おぃ」

彰は、珍しく動揺していた。頬をほんのり紅潮させて、何をするにも、何をすればいいのかさえ分からずに、とりあえず加奈を引き離そうとはしてみるのだが、離れない。

「バカ。心配したんだよ？　彰くん、丸一日……目、覚まさなくて……私――」

泣きじゃくる声は震えていた。腕をしっかりと絡めて、離れようとしない加奈の体が温かい。彰は瞳を伏せると、小さく言葉を発する。

「ゴメン……」

彰は加奈をそっと抱き締めて何度も何度も呟いた。お互いが此処にいる。世界の中にいる。生きてる。それを確認するように体を寄せ合いながら、何度も。

……

……

「で、此処は何処なんだ？」

暫くして、二人は落ち着きを取り戻し、会話を交わす。意識を失っていた彰としても、現在何がどうなっているのか、加奈には聞きたいことが山ほどあった。

「ん～と、確か……Ｎ２ブロックの施設だったかな？」

「Ｎ２ブロック？　随分と遠くまで来たんだな」

区画（ブロック）の前についているアルファベットと数字には、その区画の大まかな位置座標を示す意味がある。アルファベットは当然ながら方位をさし、（Ｅ＝東Ｗ＝西Ｓ＝東Ｎ＝北）数字は県庁からの相対的な距離を示している。旧世代の名残や必要性の観点から、市や町での表記も無論存在はしているが、時代の流れは、より位置が明確なこちらの表記にあるのかもしれない。

「――っ」

彰は自身の身体に違和感を感じていた。体を動かすたびに全身が軋む。それは、例えるならばかつてないほどに酷い筋肉痛。何とも言えない不快さとけだるさが体に媚びり付いていた。それだけではない。１日寝込んでいたせいか記憶も何処かおぼろげだった。

――確か、僕達は化物から逃げて……いや、違う。追いつかれた！？　追いつかれて、それで……ダメだ。思い出せない。

彰は懸命に曖昧な記憶の断片を探りながらも、決して加奈にその事を尋ねようとはしなかった。聞いてしまったら、もう戻れない気がして。思い出してはいけない事のような気がして。

――いや、今は考えるのは止めよう。

「にしても、随分あっちのシェルターとは作りが違うんだな」

日差しの差す窓外へと彰は目を向ける。生憎、角度が悪く、空の様子はよく見えなかったが、部屋を満たす光の量から外には円天の空が広がっているだろうことが予想できた。

「ここ地上だろ？　それに向こうじゃ医療用施設なんてなかった……」

それにしても、考えれば考えるほど、可笑しな点がそこにはあった。例えば、地上に避難施設がある事。避難所の設置されたその目的にもよるが、地上の建設物は上空からの攻撃に極端に弱い。昔、空襲に備えて作られた避難施設、防空壕は当然の如く地下に存在していたし、地下ならば敵の目に全くつかない。酸素の供給を始めとするその他多くの問題も今や、魔科学の発展により大半が解決し、避難施設を地下に作る利点は多い。
それにもかかわらず、此処はこれだけの施設を空に、そして、敵の目に晒している。何か特別な技術や理由があるのかもしれないが、彰としては少々、納得のいかない所であった。

「……違うよ。彰くん」

不意に、声を潜めながら加奈が言う。彰は怪訝そうな顔をして聞き返した。

「違うって、何が？」

加奈は、俯いたまま顔を上げようとはしなかった。口を閉ざしたまま、動かそうとしないその姿に、彰は更にも増して、納得のいかないようだ。

二人の間に沈黙が立ち込める。燦々としていた太陽には雲が覆い被さったのか、入り込む光の量が急に少なくなり、いつの間にか、室内には暗がりが広がっていた。

そんな中、暫く経って加奈は消えてしまいそうな本当に小さな声で何とも言いづらそうな仕草で呟いた。

「ここは……軍……施設なんだって」

「なっ――――！」

――軍施設？　軍だと！？

目を大きく見開き、彰は言葉を失った。それも当然の事だろう。１９３９年の第二次世界大戦以降、更なる世界大戦の勃発の危機の中でさえ、日本は戦争の悲痛と命を尊ぶ精神を忘れることなく戦争を放棄し続けて来た。それが、日本の誇りであり、また他の中立国の模範とも成り得る不変の精神である。そんな日本に軍隊などあってはならない。そして、あるはずのないものだ。

「ちょ、ちょっと待て！　日本国憲法第９条は？　戦争および戦力の否認は？　何故、日本が軍隊を持っている？　そもそも軍の所有している施設にただの民間人である僕達が入れるわけが――」

取り乱すあまり彰は答えを求めて加奈に無数の質問をぶつけるのだ

が、それはお門違いと言うものだ。全ての答えを加奈が知るはずもない。加奈自身もまだ事態の整理がついていないのだから。それでも、加奈は、ただ一つ彰に答えを返してきた。

「分かんない、分かんないけど……極秘裏に結成された国連所属の非公式組織で地球圏人類防衛軍ＮＯＡＨ（ノア）って言うんだって」

ノア――。旧約聖書、創世記における救済者であり、生きとし生きる者を滅ぼさんとする大洪水をいち早く察知し４０日４０夜と続く事となる洪水から箱舟を用いて、数多の生命を救ったとされる神の伝道者。

そして、救済者の名を冠する極秘機関……。

――まさか！　知っていたのか！？　政府はあの化物の事も、いずれ奴らが此処に来ることも。だから対策として極秘裏にノアを結成し、設備の整った避難シェルターや軍事基地を各地に設けていたのか。全ての情報を非公式にしたのは、国民の不必要なパニックを避けるため？　と言う事は、あの化物達と人類の戦力差は五分。もしくは劣勢と言う事に……。

彰の頭は恐ろしいほどの早さで、全ての情報を処理していった。無数の事実の断片を繋ぎ合わせ、思慮を巡らせ、より明確な答えを導き出す。その能力の高さは、研究者であった父から受け継いだものなのか、それとも――。

「……そっか。悪かったな。質問攻めで」

脳内の激しい神経伝達とは打って変わって、彰の口調は穏やかだった。

「ううん。しょうがないよ。私も最初聞いた時は、何かやりきれない感じだったから……」

彰は一時、瞼を閉じると、再び外へと視線を泳がせた。何も変わらない。何も変わらないはずなのに、何故だろう。世界はすっかりと色を変えてしまったような、そんな気がしていた。自分の知っていた世界。信じていた事実。平和だと思っていた、ずっと――。

でも、それは仮初。ありもしない平穏は虚像。何もかもが嘘。全てはもう、あがいても取り戻せないものだと思うと、何だかそんな毎日が遠い昔の事のように感じられる。退屈で、くだらなくて、何の輝きもない平凡な日常だったが、今はそれがどうしようもなく、愛おしい。窓は閉め切っているのに、何処からか冷たい風が吹きつけた、気がした。

「あ、彰！　良かった。目が覚めたのか」

その時、聞き覚えのある、懐かしい声が耳に触れた。彰はゆっくりとその方向へと顔を向ける。そこには何も変わりはしない、いつもと同じ和也が、安心したような顔でこちらを見据えていた。

「和也くん、どこ行ってたの？」

「飯だよ。給付するから取りに来てくれって、言われたんだけど、加奈まだ寝てたみたいだからさ、俺が行ってきた」

和也は給付されたのであろう3人分の食事を寝台の脇の机の上にそっと置くと、彰と向き合って一言。

「よっ！」

それは今まで、毎朝、学校で会った時に、交わしていたものと全く同じものであった。それを聞いた彰は、軽く鼻で笑って、言葉を返す。

「バーカ」

一瞬の静寂。その後すぐに、彼らの間には笑いが飛び交った。何かが可笑しかったわけじゃない。自分でも何で今こんなに声を上げて、吹き出すように笑っているのか分からなかった。ただ笑っていた。

それから彼らには束の間の平穏が訪れた。和也の貰ってきた食料や飲料水を片手に、声が飛び交う。それは、こんな状況の中で話すようなものではない様な緊迫感の欠片もない、くだらない話ばかりであったが、今の彼らには、寧ろ、そういう会話が必要だったのかもしれない。今までの全てが夢であったかのような錯覚さえ覚えた。

「和也？　どうかしたか？」

けれど、いつまでもそうしているわけにもいかなかった。例え、この空気をぶち壊す結果になるとしても、和也には、彰に伝えなければならない事があったからだ。それは、彰が目を覚ましたら伝えようと既に決めていた事。

話したくない。でも、話さなきゃならない。その立場の重さから、和也は、顔を伏せ、無意識の内に口を閉ざしてしまっていた。

「彰――お前に話さなきゃいけないことがあるんだ」

その言葉で加奈は全てを察していた。それは加奈も承知の事だった。知らないのは彰ただ一人。彼女は表情を曇らせて、一時、彰から目を背ける。彰は、何も言わずに和也の次の言葉を待った。

一方で和也は、中々、決心がつかないでいるのか、唇を開いては閉じ、また開いてを繰り返していたが、遂に心が決まったのか真剣な眼差しを彰に向けると、重い口取りで声を漏らす。

「彰、叔母さんが……亡くなった」

そう言い放つ和也の瞳からは一筋の涙が光っていた。
あの時、そう。彰が奴を倒した時、彰は直ぐに意識を失い崩れ落ちた。幸い、そう時間を挟まずに黒装束の一人の若い軍人によって彼らは発見され、彰は直ちに医療施設に運ばれたが、その時、彰の容体は非常に危険な状態にあった。
原因不明の高熱。完全に擦り切れた筋繊維。記憶の錯乱。呼吸器だけでなく、循環系にまで異常は広がり、彰は生死の境を彷徨っていたと言っても過言ではない。
結局、筋繊維の修復と痛みの軽減程度しか、まともな治療はできず、翌日には何故か症状は治まっていたのだが、和也は昏睡状態の彰の事を伝えようと、彰の叔母を探して、必死に駆けまわった。

しかし、そこで知ってしまった。彼の叔母の死を。運よく、和也と加奈の肉親は無傷と言うわけではないが、命にかかわるほどの深刻な状態なわけでもない。皆、無事だ。それにも関われず、彰は肉親を失っていた。また……。
それだけではない。叔母さんを失ってしまったら彰は、本当に一人になってしまう。2人は彰の身を案じていた。

「そっか。叔母さんが……」

不思議と涙は出なかった。叔母さんの事は好きになれなかったから。この人に心を許してしまったら、この人が母の代わりだと、母の存在を否定してしまいそうで。それでも、叔母さんは、いつもよくし

てくれていた。温かかった。
けれど、涙はどうしても出なかった。それは、もう出し尽くしてしまったからか、人の死と言うものに慣れてしまったからか、それとも心が死んでしまったからか。いずれにしても、今の泣けない自分が彰は何だか申し訳なかった。

沈黙。

それを最後に会話は途切れた。友を失い、親族を失い……。今の悲惨な状況を笑い飛ばせるほど彼らは強くない。惨劇の情景が、奴の恐怖が、網膜に焼き付いたように頭から離れなかった。

「ねぇ、何で私達は生きてるのかな。皆、死んじゃったのに……」

「加奈……」

顔を伏せたままそう呟いた彼女に、彰はかける言葉が見つからなかった。
同じシェルターの多くの友達を助けられなかったのは、自分。叔母の死を前に、平然としているのも、自分。自己嫌悪。

どうして？　何故？　それは誰もが思ったこと。この時ほど、世界がどれほど残酷で不条理で、不公平かと思い知ったことはない。何の前触れもなく、突如として、人の日常に入り込んできて、理由もなく破壊と殺戮を繰り返し、どれほどの命を奪い去ったのだろう。
どれほどの悲しみが生まれたのだろうか。
誰も彼も、昨日までの楽園には、もう戻れない。考えもしなかった惨劇に、誰しもが傷を負っていた。表面的なものだけでなく、見えない傷を。

誰しもが口を閉ざした一角の病室。ただ悶々とした空気が長い間、漂っていた。
そんな中、沈黙を切り裂いたのは、名も知らぬ一人の男だった。
「お前が、水原彰か？」
聞き覚えのない声に彰は振り返った。
――こいつ、いつから。
そこにいたのは、長身で長髪の男。黒装束を身に纏い、その眼光は人のものと言うには、あまりに鋭く、冷淡で研ぎ澄まされたものだった。
「あなたは？」
「俺は魁人（カイト）。地球圏人類防衛軍ノア所属の兵士だ」
深く澄んだ低い声で海斗と名乗る男は返して来た。続けて彰は尋ねる。
「ノア……。そんな人が何の用ですか？」
「俺は使いだ。小室教授が呼んでいる。知り合いなのだろう？」
和也と加奈は驚いた様子で彰を見つめるが、彰は黙ったまま、言葉を発しようとはしなかった。
小室定信（こむろさだのぶ）。特性魔科学の第一人者で、彰の父である明人とは、学生時代からの仲。世界を股にかけて、研究活動を展開していて、近年は日本のとある研究施設に定住し、魔科学の進歩に貢献している。

彰は父の職について、いや、父に関する事については、何一つ、話したことがなかったが為に、２人は彰と小室定信の接点を知り得なかった。

「それから、そっちは、倉本和也だな？　お前もだ」

「えっ――お、俺！？」

動揺する和也。しかし、本人である和也以上に、驚きを隠せなかったのは彰だった。一度、和也に目を向けて、男を睨みつける。

「何で、和也まで！？」

自分はまだ分かる。言葉を交えるだけの繋がりがあるから。だが、和也が呼び出される理由はまるで見当がつかない。和也自身もまた、訳が分からなかった。

「俺は教授に頼まれただけだ。詳しい事はそっちに聞け」

戸惑いを見せる２人。言葉は淡々と続く。

「お前達に選択肢はない。付いてこい。教授は研究施設だ」

冷酷にそう告げると、魁人と名乗る男は静かに足を進める。そして、二人は事態に多くの不信を抱きながらも、病室に一人加奈を残して、病室を後にした。

それからは暫く無言だった。案内する魁人に後れを取らないように、一定の距離を維持しつつ、教授の待つ研究施設へと歩みを進める。

足音だけが、寂寞とした空間を反響していた。

「お父さん！　お父さん！」

ふと耳に入る幼い声に、彰は足を止めた。僅かに扉の空いた病室。その隙間に目を向け、彼は絶句する。

それはあまりにも酷い状況だった。そこはまさしく医療の最前線。運び込まれた多くの重傷人が悶え苦しむ中、医師が懸命な治療を施すが、それでも手は追いつかずに、その大半が満足な治療さえ受けられずに、既に帰らぬ人となっていた。

――皆、あの化け物にやられたのか。

その時、彰はただ目を逸らすことしかできなかった。

これが戦争。人の願いとは裏腹に戦火は広がっていく。こんなにも、簡単に、あってなく人は死んでいくのに、いくら科学が進歩してようとも死んだものは生き返らない。

人一人救えない科学。魔術。数多の医者や学者達の悲痛な叫びがそこにはあるのだろうか？

それから数分歩くと彼らは施設内移動用のトランスポーターに行き着いた。それは、学校裏の避難用のトランスポーターに比べると一回り小さめの構造で、研究施設や作戦施設などの特別施設へ行き先の設定が可能になっている。当然、施設内での移動にトランスポーターがあると言う事は、建築規模も大きく、装置の維持にかかる魔力や電力の供給が十分に見込めるという事であり、やはりは軍施設。設備は避難所やシェルターのその比ではない。

彰達は光のベールに包まれて、教授の待つ研究施設へと移動した。

「ここが研究施設だ」

トランスポーターを抜けると、そこにはいかにも、と言った光景が広がっていた。そこでは、白衣を纏う多くの研究者達が各々点滅するモニターに向かい合い、忙しなくキーボードを叩いたり、画面に表示されたデータを見て、各自、意見を出し合ったりしているのが見受けられた。

そんな中、魁人は一人の研究員の元へと歩み寄り、声をかける。その研究員は、それを聞くとゆっくりと振り返り、彰達の存在に気が付くと、こちらへと足と向ける。そう。彼が小室教授だ。

「待っていたよ。倉本和也くん。そして、水原彰くん」

白髪交じりの頭に剃り忘れたような不精髭。魁人の発する刺々しい雰囲気とは対称に、小室教授は何処か温和で馴染みやすい感じがある中年だった。最も、その容貌は中年と言う割には、大分若々しく見える。実年齢は３０後半ではあるが、白髪と髭さえなければ２０代でも通るだろう。

「では、俺はこれで――」

「あぁ、悪かったね。この程度の事で」

小室教授の言葉に魁人は何か言葉を返すわけでもなく、ただ静かに一礼し、身を翻して、その場から姿を消した。

「さて、ここでは何だから、向こうに席を移そうか」

研究施設の二階。その隅に設けられた応接室に彰達は案内された。中に入ると、蛍光灯が明るく部屋を染めていて床には絨毯が敷かれていた。壁際の水槽では熱帯魚が心地よさそうに泳ぎまわり、室内は応接室と呼ぶには少々豪華だった。
2人は小室教授に促されると、戸惑いながらもそこにある、見るからに高価そうなソファーに腰を掛け座る。

「彰くんとは、清美くんの葬儀以来になるね」
教授は3人分の紅茶を淹れて、ふかふかのソファーの前に置かれた、脚の短いテーブルにそっと置いた。

「……えぇ。そうですね」

母の葬儀。そして、それは同時に父が消えた日でもある。
一瞬、彰は行方知らずの父の所在を小室教授ならば何か心当たりがあるのではないかと思い、尋ねてみようとも思ったが、止めた。
知ったところで何になる？　何が変わる？　何も変わりはしない。
父は帰ってこないだろう。父の事が気にならないと言えば嘘になるが、何を今更。そんな気もした。彰の中には父に対し一枚の厚い壁があった。あの日以来、ほとんど一人で生きてきた彼にとって父の存在は切り捨てたい過去の異物なのかもしれない。責める気は毛頭ないが、父は彼を捨てたのだから。
彰は紅茶に口をつける。紅茶はあまり飲まないが、その風味は今までに感じたことのない心地よさを残して喉を通り過ぎて行った。

「それで呼び出しって、何か僕達に用ですか？」

父の事を尋ねる代わりに彰は単刀直入に問いかける。が、その言葉に答えは中々帰って来なかった。教授は黙り込んで、浮かない顔で

彼らを見る。訝しかむ2人。教授が言おうとしている言葉には、何とも言えぬ重みがあった。それはまるで、末期ガンを申告する外科医の如く、次第に緊迫感が空間を満たして行くのが分かった。間はやけに長く感じられて、喉が渇き、嫌な汗が頬を垂れる。

そして、教授の口が静かに動いた。

刹那、時が止まってしまったかのような錯覚が襲いかかる。教授の放つ言葉に2人は直ぐに声を返すことができなかった。理解できない。疑いながらも耳には確かに入っていた。しかし、頭には全く入っていなかった。想像もしていなかった言葉に体は硬直し、彰は瞳孔を大きく拡張させる。ただ思考が止まった。理解できない。認めない。

――バカな。

「君たちは徴兵される」

教授の言葉はそのたった一言だった。

「追って軍から通達があると思うが――」

「ちょ、ちょっと待って下さいよ！」

長い空白の時間を挟んで、彰の世界は再び動き出す。声帯をいっぱいに震わせ、感情を荒げて反論した。教授は何処か悲しげで、哀れみを向けるような顔で、黙って彰を凝視する。

「僕らは民間人ですよ！？　戦いとは何の関係もないじゃないですか？　それに徴兵だなんて……この日本で？　ありえない！　認め

ない！」

教授が話し終えるよりも早く彰は口を挟んだ。認めたくない。そんな馬鹿げた事実。黙って認めるわけにはいかなかった。認めてしまえば彼らの世界は豹変し、砂漠地帯の夜風のように、温度を急激に変えて彼らに厳しく振りかかる。

「関係ない？　君はあの惨劇を間近で見て、尚、そんな世迷い事が言えるのか？」

「それは――」

言葉を詰まらせる彰。戦争は、もう始まっている。

水槽の魚が水面を跳ね、また沈んだ。

「7年前のクリスマス。第一次ルシファー襲来の日から、人類の選択肢は極端に減ってしまってね。戦うか殺されるか。それだけしか選択はなくなってしまったのだよ」

7年前――皮肉にも、全ては西暦時代の神、キリスト生誕の日に始まった。

ドイツ連邦共和国で秘密裏に行われていたX計画。XはXanadu――つまり桃源郷を意味し、ベルリンに建設されたBerlin Transdrive Laboratory（通称BTL）において、かなり卓越した研究を行っていた。そこで計画の要とされていたものが、バビロン（神の門）。従来の空間跳躍とは異なり、アルベルト・アインシュタインの一般相対性理論とワームホール形成を基盤とした新技術による超長距離空間跳躍装置であり、その理論故に、バビロンの空間跳躍は寧ろ、時空間跳躍と言えるものであった。

この技術が完全に確立されれば、距離や時間など無視した四次元的な概念の中での空間跳躍が可能となり、時空までを支配下に置いた人類はこれ以上ないほどの、まさしく神と同等の力をその手にする事が出来る。

いつからか人は夢を見過ぎていたのかもしれない。夢と現実の狭間で狂気に取りつかれた狂言者達の末路。人の驕りこそが、結果的に世界を滅ぼす引き金となった。

バビロンの起動実験の最中、突如としてバビロンは暴走。制御化を離れたバビロンは、何処かと空間接続したまま起動を続け、やがて、その歪みを通して謎の未確認生命体が転送され始めた。それが、ルシファーであり、第一次ルシファー襲来の全貌であると、教授は全てを語ってくれた。

虚像の現実。その仮面の裏側を初めて垣間見た瞬間だった。

黙り込む彰と和也。2人は完全に沈黙してしまった。昨日まで、ここだけが“楽園”だったのだ。世界で唯一、死の恐怖も絶望もない、偽りの平和。この世で誰よりも無知だったのは自分だった。

「……何で、僕達なんですか？」

掠れた声で、半ば途方にくれて聞き返した。
正直、徴兵だなんてまだ理解に苦しむし、認めたくはない。けれど、認めなければならない現実がそこにはあった。

「他の人にはできない……君達にしかできないことなのだよ」

彰達は意味が理解できずに、生気のない目で教授に視線を送る。

今まで彼らは普通の人間として、普通の日々を過ごしてきた。自分が人とは違う、特別な存在などと思いもせず、気づきもせず、成長してきた彼らは、自分の真価を未だに知らず、ここまで来た。
教授は短く息をつくと、再び口を開く。

「君達はアダムだからな」

「アダム？」

アダム。神の創造した最初の人間。イヴの夫。そして、神の戒めに従わずエデンから追放された最初の罪人。

「アダムとは、旧約聖書で最初の人間の名を意味する言葉だが、ここで言うアダムは、それとは意味が異なる。遺伝子操作を受けていない、自然発生型の能力者をさしている。君達は世界に推定１７９人と言われている、人類の希望の片鱗。ルシファーに人類が対抗すべく神がもたらした使徒のひとりなのだよ」

小室教授は、科学者でありながら神を語る自分に気が付くと苦笑した。神がもたらしたと言うのは人に希望を与える為の言葉のあやにすぎない。この世に神などいない。

「僕は……そんな大層なものじゃないですよ」

目を伏せる。何も守れなかった。誰も守れなかった。そんな自分が人類の希望など、そんなもの信じられるわけがない。

「そんな事はない。先の戦闘がそれを証明している」

「戦闘？」

先日の惨劇を指しているのだろうか――そう思ったが、彰の記憶には、襲来の日に戦闘はなかった。あったのは虐殺と殺戮だけだ。まるで心当たりのないような素振りで、彰は答える。
和也はチラリと彰に目を向け、その横顔に狂気に満ち満ちたあの日の彰を重ねては、直ぐに首を横に振った。あれは彰じゃない。逃避にしか聞こえないが、それが和也の見解だ。

「襲来の日、君は逃げ延びた山岳で一体のルシファーを絶命させた」
突然、大きく心臓が波打つのを感じた。いや、心臓と言うより、体全体に流れる血が急に勢いを早めたようだった。それは、興奮や昂揚とは違う。もっと不快な何かだった。

「若干15歳の何の訓練受けていない少年にもかかわらずだ。覚えていないのか？」

「……ぅ……」

次に彰に降りかかったのは脳幹から揺らされるような耐え難い頭痛。断続的に続く痛みは、一定の間隔で強さを増して、同時に、脳内を幾つもの断片的な記憶が暴れ回った。
色のない情景。知らない誰かの不敵な笑みが口元の両端を釣り上げて、道化師の如く弧を描く。

――こんな奴、知らない！　知らない！　知らない！
弾力のある筋肉質な心臓を潰す快感。命を弄ぶ狂喜。
――そんなものは知らない！

モノクロの景色で、凄まじい速さでスライドする欠けた記憶の一部始終。返り血を舌先でなでる悪魔は、彰と同じ顔をしていた。背筋に悪寒が走る。

自分が自分じゃない気がした。あの体も、あの力も、自身の把握していた自分ではなかった。この身の中に得体の知れない何かが息づいている。それは彰から多くのものを奪い去って行った悪魔よりも不気味な存在だった。
怖かった。兵士として戦う事がではない。変わることが。ルシファーと戦い、戦争に染まって行けば行くほど、自分を失っていくような、そんな気がしていた。身を削るたびに、影は広がり、闇が侵食していく。貪っていく。彼の身体を。自分が自分じゃなくなる瞬間が来る。それが、ただ怖かったのかもしれない。

「彰――」

かける言葉もなく、和也はじっと彰を見つめていた。

数日経って避難勧告は解除された。それは、永遠と感じられた時間の終わりを意味する。
この数日、あまりにも多くの事がありすぎた。彰達は、くたびれた足取りで町へと帰るが、そこは、最早、自分たちの町ではない。避けがたい現実の漂う、ただの廃墟。帰るべき家は、無様に半分ほど形を失い、そこに帰ってくる人はほとんどいない。死んだ者。家を失った者。この街に復興の機会はない。死んだのは町も同じだった。

「なぁ、加奈は……これからどうするんだ」

変わり果てた町並みを右手に彰は加奈と共に坂道を上っていた。そこは2人が今まで何度も通ってきた道。傾斜が緩い代わりに道は長く、それも直線ではなく山を避けるように大きくうねり、続いている。

普段ならば、そこの民家の狭間にある階段から一気に駆け上がり、坂を抜けていた。知る人ぞ知るちょっとした近道だったが、今はもう崩れた瓦礫に阻まれて通り抜けることはできない。それがなんだか無性に切なかった。

「私は――此処を離れる。家がないから、お父さんの実家に行くんだって」

淋しげな瞳。小さな声。変わり果ててしまっても、此処は故郷なのだ。嬉しくて泣いた日も心配かけて怒られた日も、温かく包んでくれた。こんな状態でもそこには思い出が眠っている。やはり、離れるのは辛い。

「そっか……」

左手に映るのは海岸線。沈みかけた太陽が海にひっそりと溶け込んで、冬の潮風が2人に厳しく吹きつける。鳥たちがいないその空から光が完全に退場する前には、何とか2人は目的の場所へと辿り着けた。

そこは、悲劇の地。終わりの始まりの場所。不思議とそこだけは損傷が殆どなく、いつもと同じように彼らを迎えていた。けれど、明かりもなく、そして、もう人が通う事もないであろうその建物は学校と呼ぶには、あまりに静かすぎた。

皆の魂は此処には眠っていない。それでも此処を訪れたのは、墓のない彼らの魂がこの街を彷徨っているのなら、きっと此処にも立ち

寄るだろうと。そう思ったから。
彰は持ってきた花束をそこにそっと添えてゆっくりと手を合わせて目を瞑る。

――ごめん、皆。

彰は徴兵される。ここに立ち寄るのは恐らくこれが最後になるであろうことは分かっていた。彼の目には悲壮な決意が見え隠れし、そして、そこには自虐的な色が映える。
見捨てた。如何なる理由がそこにあったとしても、このままでは黄泉の世界で彼らに合わせる顔がない。だから、贖罪する。これから救える命で。完全な自己満足だと自分でも分かっている。けれど、偽善だとしても罪は償いたかった。

「彰くんは……大丈夫だよね？　居なくなったり……しないよね？」

合わせた手を静かに離す。不安げな加奈に彰が返す言葉は、彼女を安堵させるものではなかった。彰はじっと花束を見つめたまま、目を伏せる。

「……分からない」

嘘でもいい。大丈夫だって、そう言って欲しかった。それに対し、彰はその一言が限りなく無責任で、ただの気休めに過ぎない事を知っていた。それ故に拒んだ。
彰はもうただの民間人じゃない。戦場に赴く戦士。それは守るために自己を犠牲にする存在。生きて戻れる保障なんて何処にもなかった。軍、いや、国からの指令。人類存亡のための徴兵。犠牲。

「なぁ……加奈」

「何？」

「加奈は覚えていてくれるか？　僕の事――」

日が落ちる。次第に天空を覆って行く暗闇が、自分の中の知らない自分を重なった。嫌な空だ。

「……それ……どういう意味？」

「それは、今は知らない方がいい。けどいつか、時が来たら、話すよ。ただ、加奈にだけは覚えていてほしいんだ。まだ何も知らない、無垢な少年だった頃の“水原彰”をただ覚えていてほしい」

――この世に生きた証明と生きて戻る理由のために。

「彰くん……」

2人の間に広がる夜陰の様な深い静寂。遠方の薄闇の海から流れる潮風が凍てつく冷たさで身を裂いていった。

誰しもが思い思いに最後の日を心に刻んでいた。夜が来て、次に朝が来れば、皆この温かかった故郷を去って行く事になる。彰もまた明日には此処を発たなくてはならなかった。ノア日本支部本部のある都心、東京に向けて。

昨日までは学生。明日からは兵士。

守る為、生きる為、彰は幾度となく奴の恐怖と闘わなければならない。勝たないとならない。戦争が終わるか、死ぬ、その日まで。

「見ろよ……加奈」

「えっ？」

「手ぇ……震えてる。もう敵は倒したのに、震えが、止まらない。記憶は曖昧なのに、全身が覚えてるんだ。頭から離れないんだ。死体みたいなあいつの冷たさや肉の感触。血の臭いを――」

自分の震える両手を虚ろな瞳で見つめる彰は、酷く憔悴して、弱々しく目に映った。

加奈は何も言えなかった。自分のせいで彼にこんな辛い思いをさせてしまった。そんな気持ちで胸が締め付けられるようだった。

――彰くん。

何か支えてあげたくて、大好きな人を慰めたくて、ただ想いが体を突き動かす。ふと、気が付けば、加奈は彰を優しく包み込んでいた。加奈は一瞬自分でも驚いたが、表情は直ぐに凛としたものに変わる。

「大丈夫だよ。彰。もう大丈夫。彰は私を守ってくれた。もう安心していいんだよ。私がいるから。覚えてるから。だから今は、全部忘れて、ゆっくりと休んで……」

“彰くん”から“彰”になった時、2人の距離はゼロへと限りなく近づいていた。肉体的にも、精神的にも。彰にとって加奈は安息の場で、加奈の安息は彰。その事に気付いた2人。互いが互いを必要としていて、されている。雲と星が入り交じる空の下で静かな時間だけが過ぎた。

「好きだよ。彰」

心を撫でるその声がただ気持ちよくて、彰は一瞬、何もかもがどうでもよくなってしまいそうだった。嬉しかった。思いが通じ合った事が。心地よかった。互いを傍に感じられる事が。いつまでもこんな時間が続けばいいと、心底思った。

不意に、淡い白透色の燐が頬に触れた。ひらひら揺らめきながら舞い降りた空一面の細かな光粒。少し早い粉雪。右も左も分からない深海の様な絶望の中、ゆらりゆらりと心地良さそうに舞い踊る妖精は何処か人魂を思わせた。その優美さはさながら海雪の様で、触れればすぐに消えてしましそうな儚さで彼らの一時の幸福を必死に祝福していた。

彰は瞼を閉じて、考えた。今までの事。そして、これからの事を。再び開いたその眼は、寂しげに、抱きかかえた加奈を見つめていた。嬉しさは悲しみへと変わる。嬉しさの裏には辛さが潜んでいたから。もう会えなくなるかもしれない。一緒にはいられない。死ぬかもしれない。
彼女のありのままのその気持ちに、彰は応えようとはしなかった。

「……元気で、な」

ゆっくりと手を離し、そう告げた。告別を込めた一言だった。身を返して、背を向ける。結局、彰は最後まで加奈に本心を打ち明けることはなかった。
踏み出した一歩はもう止まらない。辿ってきた道は振り返らない。背中越しに加奈のすすり泣きが風に交じって聞こえたが、気のせいだと自分に言い聞かせて、無理矢理に足を進めた。

――何で、僕達はこんな事に……なってしまったんだ。

行き場を失ったいくつもの感情は涙となって溢れ出す。仮初でもいい、平和にすがり付いていたかった。涙を軽く振り払い、彰はただ歩き続けた。

加速した残酷な現実。計り知れない不安。失いたくないと思える温もりに気付いた時、誰よりも強く在りたいと思えた。
生きて、また愛すべき人と会いたいから――。
抱えた気持ちはそのままで、次に会うその日まで、強く在り続けると、慟哭の空に誓いを立てた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3100i/

神ノ使徒 －サイレントフレイム－

2010年12月4日13時50分発行